

**スポーツピア** スポーツ社会の政治術 岩渕健輔

2016/10/18付 | 日本経済新聞 朝刊

「ラグビーは紳士のスポーツ」が建前だと気づいたのは22歳の時だった。英ケンブリッジ大に留学。ラグビー部に入ると、何かおかしい。本職である司令塔のスタンドオフに入るつもりが、任されたのはウイング。「君はまだコミュニケーションに慣れていないし、足が速いから」。主将の言葉にうなずいたが、ボールは全く回ってこない。会話に問題がなくなっても、ポジションは固定されたままだった。

「あいつらはとんでもないぞ」。話しかけてきたのは実力十分なのに試合に出られない南アフリカ人だった。選手起用を決めるのは主将だが、表できれいな理屈を唱えながら、裏では自分に近い人間を重用しているのだという。

主将は選手の投票で決まる。当時は多数派のイングランド人に支持されたニュージーランド人だった。部員の目標は年に1度のオックスフォード大との定期戦への出場。「ブルー」という称号が与えられ、名門校の教師など様々な世界への道が広がるからだ。人生を変える称号を求め、部内では主将中心に激しい政治闘争が行われていたのだ。

自分たちが目標を遂げるには次の主将選に勝つしかない。仲間と決意し、動き出した。主流派の中の不満分子の目星をつけ、担当を割り振る。私は2人への工作を行った。

敵陣営も警戒を厳にしている。好きな異性との距離を縮めるかのように、偶然を装うことを心がけた。ターゲットの時間割を入手。授業の合間にキャンパスを移動する時、たまたま出会ったそぶりで話しかける。次は自分のカレッジで開かれるパーティーに招待し、怪しまれないよう他の部員も呼ぶ。食後の紅茶になってようやく2人で話す。

日に日に距離を詰め、最後はパブで口説く。まずは大義を語った。「実力以外で選手起用を決めるなんてラグビーじゃない」。その裏でこうほのめかした。「我々に投票した方が君のためにもなるよ」

オ大との定期戦後はラグビーの聖地、トゥイッケナム競技場でパーティーがあり、選手は恋人を呼ぶ。「あいつの恋人は名誉欲が強い。まず彼女を説得しよう」。こんな案も出て仲間が実行に移した。

結果は大勝。私も次の試合からスタンドオフに移った。権力とは何か。現地の授業で学んでいたヘーゲルやニーチェの政治哲学とつながるものが、ラグビー部にあった。

表面で大義を語りながら、裏で自分の打算を正当化する。各国の関係者と話す立場になり、この話法はスポーツの国際社会全般に共通するものだと知った。ケンブリッジの例は極端だとしても、英国人はこの政治的な感性を実体験で学ぶ場が豊富にある。そうでない日本が、世界で交渉できるスポーツ人材をどのように育てていくか。代表チームの成績や競技の普及にも直結する大きなテーマだ。

(ラグビー日本代表GM)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.